



不羈独立——明治のリアリズム

それは過去のものでしかないのであるのか——

渡辺利夫 拓殖大学学事顧問・前総長

封建制の「分権」が 豊富な人材生む

日本が主権国家として世界史に登場したのは、幕末の混乱期をくぐり抜け、列強に門戸を開く一方、中央集権的な国家体制の形成に成功した明治維新によってであった。

江戸時代の日本は、世界でも稀にみるほど高度に成熟した封建制度を擁し、この制度にもとづいて二百数

十の藩が割拠した。最も強力な徳川藩を中心に中央政府が徳川「幕府」として君臨し、地方は多分に自立的な各藩の統治に委ねられた。この時代の政治システムが徳川「幕藩体制」と呼ばれるゆえんである。

すなわち、徳川幕府が中央政府として支配的な地位にあったとはいえず、原理的には徳川藩も数ある諸藩の一つであり、地方藩は徳川幕府から相対的に自立した政治単位であった。幕府の法令は天領と呼ばれる直轄領

においてのみ施行され、他藩に及ぶことはなかった。各藩は独自の法律を制定し、固有の行政権、徴税権、裁判権をもって統治されていた。

さらに、各藩はそれぞれ独自の文化、すなわち言語、習慣、学問、祭礼はもとより、固有の産業政策で地方物産の振興に努めてもいた。このような全国にまたがる幕藩体制の著しい多様性こそが、江戸時代日本の封建制を彩っていた。全国に分散する二百数十の諸藩の中で有力な地方藩は、

その周辺に群小の藩が凝集する地域の「小国家」的存在であった。北から南へ、現在の仙台、加賀(金沢)、尾張(名古屋)、岡山、広島、福岡、熊本が代表的な地方の有力藩であった。もちろん反幕府的行動は厳しく制限され、各藩の軍事力は少なくとも

幕末までは、幕府の強力な統制下におかれた。各藩は、幕府によるインフラ建設のための事業費

負担、各藩内に生じた騷擾や内乱には派兵をもって幕府を支援する、などの義務をも課せられていた。その意味からいえば、江戸時代の日本は、一方で幕府への権力集中、他方では各藩への権力分散という平衡のうえに存在し、二百数十年にわたり安定的に維持されてきたということができる。

しかし、幕末期のように幕府の統治力に衰えがみえた時には、薩摩や長州のような地方の雄藩が結集すれば、新政府を樹立するほどの力量が地方の内部に蓄えられていたことをも示す。明治維新とは、すなわちそういうことである。

司馬遼太郎が見つめた明治維新の成功はまさに、日本が権力を一元的に集中させた専制的な王朝国家とはまったく対照的に、権力の多元的な分散を特徴とする封建制度を典型的に擁していたがゆえである。封建制は旧体制が衰退し劣化し機能不全に陥れば、これに代わる「代替者」と

して新体制を運営し得る能力をもつ人間集団を育ててきたのである。

シナ朝鮮は集権の専制統治

日本の封建制度は、源頼朝が鎌倉に武士政権を樹立し、政権樹立に貢献した武士団にその貢献度に応じて領地を給付し、武士団はこれを「御恩」として拝領。御恩の代償として命を賭した主君への「御奉公」をもって報いたことで定着した。主君と武士団との人的主従関係が封建制度の根幹である。

封建制の完成期が江戸時代である。いうまでもなく徳川家康が関ヶ原の戦いに武功を立てた武士団との間に主従関係を結んで成立した。武士団は拝領した領地内で大名たる藩主となり、藩主もまたその家臣に土地を御恩として与え、家臣は御奉公をもって領主に仕えるという、土地を媒介とした人的な主従関係を構築した。二百数十の諸藩が徳川幕府に



浮世絵師揚州周延画「温故東の花旧諸侯参勤御入府之図」。長州藩主毛利敬親の参勤交代の一行が江戸高輪にさしかかったところ。行列は総勢1000人におよんだ。領国を独自に統治した藩主たちは、一方で徳川幕府に恭順を示した



わたなべ・としお 昭和十四年山梨県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒、同大学院博士課程満期退学。経済学博士。筑波、東京工業大学の各教授を経て平成十二年拓殖大学国際開発学部教授・同学部長、十七年同学長。二十三年同総長を兼ね、二十五年学長退任。二十七年総長を退任し、学事顧問に。経済学だけでなく歴史分野でも日本アジア関係の造詣が深く、昭和六十年吉野作造賞、平成元年アジア・太平洋賞、八年開高健賞、二十三年正論大賞など。二十八年から日本李登輝友の会会長。歴史分野の著書に「私のなかのアジア」(中央公論新社)、「新脱亜論」(文春新書)、「君、國を捨てるなれ」坂の上の雲」の時代に学ぶ」(海竜社)、「アジアを救った近代日本史講義」(P日P新書)、「放哉と山頭火―死を生きたる」(ちくま文庫)、「士魂 福澤論吉の真実」(海竜社)など。

仕え、各藩の家臣が領主たる大名に仕えるという重層的な主従関係が、江戸時代の日本を覆っていたのだ。

アジアには、というより日本と現在に類する封建諸国を別にすれば、日本に類する封建制度を歴史としてもつ国は存在しない。

古来、シナに存在したのは封建制ではなく郡県制(後に州も)である。全土をいくつもの郡に分け、郡の下に県を設け、それぞれの郡と県を中央の直下において、その統治は中央から地方に派遣された官僚によって一元的になされるという、皇帝を頂

一瞬で散った攘夷の火花

さて、地方分散的で多元的な徳川幕藩体制のもとで長い平和を享受してきた日本を揺るがし、最終的に日



嘉永6年6月に黒船4隻で江戸湾浦賀沖に初来航したペリーは、翌7年1月に再び来航。黒船を9隻に増やして幕府を威嚇し、江戸は大きな動揺に包まれた

点とする古代的な官僚政治体制が一貫して踏襲されてきた。朝鮮の王朝はシナのコピーだといっている。郡県制は、封建制とは対照的な中央集権的で専制的な統治機構に他ならない。日本が封建制、シナ、朝鮮が専制の郡県制を統治機構としてきたことが、両者の近代化の成否を決める要因であった。

日本の江戸時代は、土地を媒介とした人的主従関係を長く維持してきたのであるが、もう一つ、朝廷すなわち天皇と天皇を囲む貴族集団(公家)の存在を無視するわけにはいかない。権勢をきわめた徳川幕府による統

本の近世を終焉させる時期、つまり「幕末」が十九世紀後半期にやってくる。

アヘン戦争により、並ぶことなき大國清朝が無残にも敗北を喫した事実が一つだが、何よりも嘉永六年(一八五三)米東インド艦隊司令官ペリーが黒船四隻を率いて浦賀沖に來航、開国を求める米大統領の国書の受け取りを強要されたのである。心ならずも国書を手渡されたのは老中の阿部正弘であったが、一年後の回答を約してペリーをひとまず引き取らせた。

この一件から、広く知られる幕末の混乱期が始まる。日米の軍事力格差は圧倒的であり、国書を受け取ったものの幕府にはこれに対処する能力はなかった。思いあぐねた阿部は、国書を朝廷に報告し、諸大名に意見具申を求めた。しかし、諸藩による衆議は、開国と攘夷の両論の対立を深めるだけであった。

翌安政元年(一八五四)七隻の黒

治下で、朝廷の存在意義が薄れたことはまぎれもない。しかし、武士集団たる幕府がその力をもって朝廷を廃絶しようという挙に出たことはついでなかった。むしろ世俗の権力集団である幕府は、古代に系譜を引く天皇を戴く朝廷の承認を受け、初めて世俗世界において真の権威と名譽を身につけることができた。

明治維新が「王政復古」、すなわち古代に淵源をもつ天皇による治世に復帰するという形をとり、そのことによって、新政府は権力はもとより、権威と名譽をも掌中にできたのである。

船を従えて再来航したペリーに、幕府は日米和親条約を呑まされた。鎖国体制の終焉である。新たに大老となった井伊直弼は、米総領事ハリスとの間に、領事裁判権と関税自主権を認められない不平等条約・日米修好通商条約を、勅許つまり天皇による裁可を得ないままに調印。蘭、露、英、仏とも同様の条約締結を余儀なくされた。

条約締結に激憤する諸藩の志士を刑死に追い込んだ井伊は、水戸藩と薩摩藩を脱藩した志士により殺害され、幕府の権威は急速に降下。朝廷を新たな権威としようとする尊皇攘夷派の志士が各地に跋扈するにいたった。長州藩は下関を通過する英、米、仏、蘭の艦船に攻撃を加えたものの、後に四国連合艦隊の報復を受け、下関砲台は占領された。攘夷の完全な敗北であった。その前年には、薩摩藩が非礼な英人を殺傷した生麦事件に対する報復として、英軍により薩摩湾が攻撃された。このいわゆ

薩英戦争において、薩摩軍は善戦したとはいえ、列強の背後に存在する強大な軍事力を思い知らされ、攘夷など不可能事であることに心底覚醒させられた。

外国の介入一切排した御一新

薩長は、尊王攘夷の攘夷を剥がし、「尊王」をスローガンとする倒幕に傾き、坂本龍馬などの仲介もあり、倒幕を求めて両藩の同盟がなった。これに岩倉具視を中心とする公家

が加わり、「討幕の密勅」を手にした倒幕軍の意気は上がった。

この形勢に先手を打って幕府は「大政奉還」の挙に出るものの、これをよしとしない倒幕軍は政変により「王政復古の大号令」を発して、天皇親政の新政権を樹立。なお抵抗する幕府軍に対し倒幕軍は江戸城総攻撃を決意、すんでのところ西郷隆盛と勝海舟との会談により無血開城となり、「御一新」と呼ばれる明



文久3(1863)年に馬関(関門)海峡を通る外国船を襲撃した長州藩は、英米仏蘭4国連合艦隊の報復を受け、翌年には下関(長府)砲台は次々に占領された。これらの現実が攘夷の熱を一気に冷ました

長州藩も四国連合艦隊による攻撃後、大村益次郎が中心となって藩を挙げての軍事体制を敷き、薩摩經由でグラバー商会より艦船、ミニエー銃、ゲベル銃を購入するなどして軍事力を高めた。佐賀藩は薩摩の島津斉彬が模範としたほどの工業力を要していた。鍋島閑叟(直正)の強い意欲により、反射炉や蒸気船「凌

治維新が成った。

ここで重要なことは、幕府側にフランス、倒幕軍側に英国が支援者として名乗りを上げたものの、これら列強の介入を一切排したうえで御一新だったことである。列国代表に王政復古と条約遵守を告げ、新国家の大方針を内外に宣した。五箇条の御誓文がそれである。

- 一 広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フベシ
- 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス
- 一 旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
- 一 智識ヲ世界ニ求めメ大ニ皇基ヲ振起スベシ
- 一 学制発布、国民皆兵、貨幣制度改革、地租改正、殖産興業・富国強兵、大日本帝国憲法発布、帝国議會開設、議會選挙、日清戦争勝利、日

風丸」を建造、最新の軍備を整えて江戸城開城ににらみをきかせ、五稜郭包圍にいたる戊辰戦争では、倒幕軍のリーダー的な存在となった。

伊子の宇和島藩も小藩でありながら、開明的な藩主伊達宗城により殖産興業・富国強兵に人材を積極的に登用、黒船来航から三年後に、薩摩に次ぐ国産第二号の蒸気船を建造、しかもすべてを宇和島の人材によってこれを完成した。西南雄藩を中心に日本の各藩でそれぞれ分散的に拡充されてきた軍事力が、倒幕の一点に凝集した時のエネルギーには巨大なものがあったといわねばならない。封建制の強靱性は、実にその多様性にある。

「西洋の衝撃」を受けて中央権力たる旧体制、つまりアンシャンレジームが動揺して事態収束能力を喪失した時、これを打倒し、かつこれに代わる新たな中央権力を樹立して新国家を運営する能力をもつ「代替者」が出現するか否かが、近代化の成否

英同盟締結、日露戦争勝利、不平等条約改正等々、明治の近代化のプロセスを概観すれば、これらすべてが五箇条の御誓文をその原理的な根拠とするかのごとくにみえる。明治維新の開明性は確かにこの御誓文の中には顕現しているといつていい。

散在する力が凝集した時の強靱性

封建制度とは、多元的で地方分権的な世界である。各藩の徳川幕府からの自立性は相当に高いものであった。特に西南雄藩といわれる諸藩においてその傾向は強かった。薩摩藩は島津斉彬が藩主となるや、同藩において日本初の洋式艦「昇平丸」、蒸気船「雲行丸」などの造船事業、反射炉や溶鉱炉などの製鉄事業に精出し、維新後の殖産興業・富国強兵の原型を薩摩の地において展開した。薩英戦争で英国と互角に近い成果を残したのも、それゆえであった。

を占うポイントだと私はみる。

日本の場合、この代替者を醸成した土壌が、源頼朝の時代に始まり江戸時代に成熟をみせた封建制である。封建制を特徴づけるものは、地方分散型の権力構造であり、とりわけいくつかの雄藩には、政治、経済、教育、文化、軍事力において秀で、単独では中央政権を覆す力はないものの、雄藩が連合すれば、アンシャンレジームの代替者となることは十分可能であった。明治維新とは、薩長を中心とする西南雄藩が、古代に淵源をもつ天皇を最高權威のシンボルとしてアンシャンレジームに挑戦、転覆して文明開化と呼ばれる近代化に向けて、そのエネルギーのすべてを噴出させ、これに成功した革命であった。

軍事力で劣勢な日本が、日本を凌駕する軍勢を擁した清国、ついでロシアとの戦争に勝利したことは、この二つの戦争を準備する過程での「殖産興業・富国強兵」というスロー



た議合制を基調とする立憲君主制の成立を求める「変法自強」運動が提唱された。皇帝の詔までを得て、これが展開を始めようとするや、政変により指導者は国を追われた。

結果は、義和団という宗教的で熱狂的な民衆の反乱であったが、これも列強により鎮圧されてしまった。王朝打倒のための革命、これしか後に残るものはなかった。孫文らの辛亥革命により王朝はついに打ち倒されたものの、その後、国家体制を樹立し、これを運営し、近代化を担う

ガンに国民が一丸となって呼応し、大願を成就したことを意味する。「坂の上の雲」を日本がいちはやくつかみ得た要因を、私はそう考える。

無残なシナ朝鮮の近代化失敗

これと対照的に、朝鮮、シナの近代化は容易に進むことはなかった。両国は古代的で専制的な王朝の伝統を引き継いで、皇帝や王という絶対的権力者を戴き、これを官僚政治家が十重二十重に取り巻き、郡県制と称される極度に中央集権的な統治システムのの中に全土の末端までを組み込んできた。「権力資源」はすべて中央に集中し、地方には次代を担う「代替者」が育つ空間はほとんど存在しなかった。李朝時代の朝鮮はその典型である。

しかも、朝鮮の場合、巨大な中華王朝を宗主国とし、みずからはそれに服属するという往時の漢族中心の華夷秩序の中に統合されることを余

儀なくされた。日本がその体制の中に組み込まれなかったのは、おそらく波荒い対馬海峡に隔てられた島国であるという地政学上の理由もあるうと思われる。

この朝鮮に海峡を隔てて位置する日本は、朝鮮の開国・維新なくして南下するロシアや強大な清国からみずから守ることができないという恐怖に直面した。日清戦争に勝利し、清国と朝鮮の切断に成功した日本は、改めて「自主独立」の朝鮮の近代化を促した。

だが、長く根付いた強固な王朝官僚政治家ならびに彼らの心底に深く刻み込まれた「事大主義」思想と「衛正斥邪」思想は、ついで彼等を近代化に覚醒させることはなかった。中央集権的な朝鮮の王朝システム、それを支えるイデオロギーの呪縛が、西洋の衝撃を開明的に容認させ得なかつたのである。「代替者」はここにはいなかった。

シナの近代化がなぜあれほど無残にも失敗したのか。中央集権的王朝官僚政治家ならびに彼らの心底に深く刻み込まれた「事大主義」思想と「衛正斥邪」思想は、ついで彼等を近代化に覚醒させることはなかった。中央集権的な朝鮮の王朝システム、それを支えるイデオロギーの呪縛が、西洋の衝撃を開明的に容認させ得なかつたのである。「代替者」はここにはいなかった。

「代替者」はどこからも現れることはなかった。国民党、軍閥、さらに共産党までが加わった、ひたすらの混乱であった。

もう一度いえば、アンシャンレジームがAncienであるがゆえに劣化し衰退していく時、これを破壊して新たな正統的レジームを創る「代替者」が伝統の中に用意されていたのか否かがポイントなのである。

日本は「代替者」が確かに存在したが、朝鮮、中国にはこれが現れなかつたのだといわねばならない。

坂の上にある「公」と「利他」

司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、かつてはアンシャンレジームの中で「冷や飯」を食わされていた雄藩の下級武士たちが、相互に確執を繰り返しながら、ついには手を結んで維新を成功させ、維新のエネルギーを殖産興業・富国強兵に注ぎ、そうして日本の生命線であった朝鮮、満洲

にも失敗したのか。中央集権的王朝国家の重い、実に重たい伝統の重石からみずからを解き放つことは不可能事であった。アヘン戦争に敗れ、西洋の衝撃を日本に比べてはるかに強く受けたはずの清国も、遅ればせながらこの戦争を経て、開明派の洋務派官僚が勢力を増し、「洋務運動」と呼ばれる近代化運動が開始された。明治維新と同じ頃のことである。

しかし、開明派の官僚とはいえ、守るべきは中華の伝統の根本（「中体」）であり、これを守るために西洋（「洋」）の学術や軍事力を利用（「用」）しようとしただけであった。「中体西用」である。西洋の学術や軍事力を生んだ文明には関心を寄せず、それゆえ社会全体を沸き立たせる文明開化とはならず、惨めな挫折を余儀なくされたのである。

日清戦争に敗北した後には、「瓜分」といわれる、ウリがバラバラに割けるようなシナ分割の危機に陥り、ようやくにして明治維新に範を取っ

に迫る世界最大の軍事国家ロシアに挑んで、辛くもこれに勝利を収めた物語である。

この時代を生きた多彩な人物を配して、いかにも勇猛にして果敢な、そして志を高く持して、近代主権国家の建設に邁進した明治のサムライの物語である。あの時代を現代にピッドに再現する書き手として、司馬遼太郎ほどの力量をもったストーリーテラーを私は他に知らない。

主人公の秋山兄弟についてだけ、記しておきたい。明治という時代を鮮明に浮かび上がらせたストーリーリとして私が一番好きな司馬の語りだからである。

秋山真之が大学予備門の試験に合格し、正岡子規ともども学生生活をしばらく送っていたのだが、自分の生活費を薄給の兄好古に頼らざるをえないことにいたたまれず、実入りのある別の道に進もうかと考え始めている。しかし、そのことを兄にいえば「くだらぬことは心配するな」



日露戦勝後の明治38年10月23日、横浜沖で行われた帝国海軍連合艦隊の「凱旋観艦式」=聖徳記念絵画館所蔵。明治天皇（中央）は御召艦「浅間」で臨席した

の一言で終わってしまうにちがいない。もう一つ、真之には海軍に入っ
て国のために身を捧げたいという思
いが芽生え、進退きわまっていたの
である。ここは思い切って自分の進
路についての考えを兄に聞き質して
みようと思いを定めた。

もつとも自分の進路などと聞いた
ところで、兄は「そんなことは自分
で考えろ」というに決まっている。
ならばと、真之は「人間というもの
はどうして生きればいいのか」と聞く
ことにした。ここで司馬は好古に次
のように語らせている。

「おれは、単純であろうとしている」
と、好古はいった。さらに、

「人生や国家を複雑に考えてゆくこ
とも大事だが、それは他人にまかせ
る。それをせねばならぬ天分や職分
をもったひとがあるだろう。おれは
そういう世界におらず、すでに軍人
の道をえらんでしまっている。軍人
というのは、おのれと兵を強くして
いざ戦いの場合、この国家を敵国に
勝たしめるのが職分だ」

—— 負ければ軍人ではない。
と好古はいう。

「だからいかにすれば勝つかという
ことを考えてゆく。その一点だけを
考えるのがおれの人生だ。それ以外
のことは余事であり、余事というも
のを考えたりやったりすれば、思慮
がそのぶんだけ曇り、みだれる」と
いう。

—— それで？

という顔を真之はしてみせた。
「それだけさ、おれがこの世で自分

について考えていることは。——」
「あしのごとは、どうなります」
「知らん」

人間が国家における自分の役割を
こうまで明快に悟って屈託のなかつ
た時代、この時代を私は恋慕する。
私的にではなく公的に、利己的にで
はなく利他的に生きることの中にこ
そ人間の幸福がある。そのことを立
証した時代を、私どもはつい先だっ
ての歴史の中にもっている。

開国から日露戦争勝利にいたる、
司馬遼太郎の描いた「坂の上の雲」
の時代である。個々の人間の栄達
が、国家の興隆と何の矛盾もなく収
まっていた、開国・維新时期から日露
戦役勝利にいたるあの時代。こんな
時代が日本の歴史の中に確かに存在
したのだ。

明治維新から百五十年が経つ。
「坂の上の雲」の時代、人々の思い
は、果たして過去のものになってし
まったのだろうか——。